

シリーズ第25話で「滋賀県は、仏教美術、特に優れた仏像の宝庫」と紹介しました。が、湖北地方には、平安・鎌倉・室町時代の十一面観音が数多くあります。なかでも、JR北陸本線高月駅近くの柏原集落の南にある「渡岸寺観音堂」には、日本一の美しさを誇る国宝の十一面観音立像があります。

十一面観音は、密教の伝来とともに奈良時代から信仰を集め、病氣治癒などの現世利益を祈願して多く祀られました。観音菩薩の中では聖観音に次いで多く作られました。頭上の十一面のうち、前後左右の十面は菩薩修行の階位である十地を、最上部の仏面は仏果を表し、衆生の十一品類の無明煩惱を断ち、仏果を開かしめる功德を表すとされています。

「観音堂」は、伝承による天平8(736)年に都で痲瘡がはやったとき、聖武天

皇の勅により、越前の修験道僧泰澄が十一面観音を彫り、建立されました。この寺は、「光眼寺」と称し、延暦9(790)年に最澄によって再興されています。織田信長と浅井長政が戦った元龜の争いで観音堂と仁王門を残して焼失しますが、観音像は地元農民によって土に埋められて難を逃れたと伝わっています。

観音像は、これ以降も数奇な運命をたどります。光眼寺は、慶長年間(1596)1615年に浄土真宗に改宗して廃寺となり、新たに「向源寺」を建てて観音像を守ったといわれています。明治時代になると廃仏毀釈により、各地の寺院は壊され、仏像の多くは海外へ流出します。さ

観音の里「渡岸寺と十一面観音」



渡岸寺 観音堂

らに、浄土真宗では阿弥陀仏以外の仏像を祀ることは許されず、この観音像も例外ではありませんでした。しかし、地元の方々により本堂から離れた場所に安置されました。寺院は集落名の「渡岸寺」として「渡岸寺観音堂」と名

ように大きな髻をつくり、それぞれ化仏をつけています。特に、頂上の菩薩面に二段に五つの化仏をつけていること、しなやかに腰をひねった姿など他に類を見ない観音像です。

製作時期は、天平年間(7

付けられました。この十一面観音は、大部分すなわち髻頂から両腕・両天衣、台座蓮肉までがヒノキの一枚から彫出され、像総高は195センチをはかります。頂上面が五智宝冠をつけた菩薩相で、牙上出相と瞋怒相の各一面が左右の耳の後方に配されるなど頭上面の配置に特色があります。鼓胴形の大きな耳飾りをつけることも珍しく、どの面も本体と同じ

29(749年)と伝えられています。髻が高く、のびやかな手足、固く引き締まった張りをみせる肉身の表現、整理された衣文、切れ長のまゆと眼の相好などの作風から、9世紀半ばから後半に製作されたと推定されます。本像は数少ない天台系の密教美術の貴重な遺品というだけでなく、日本の仏教美術の中でもひととき目立つ優品です。

この仏像が、いつどのような理由で湖北の地にもたらされたのかは、よくわかっていませんが、今もなお篤い信仰の対象として、地元の方々の手によって守り継がれていることは、注目するに値します。

現在、観音堂の横に建てられた収蔵庫で、地元の方々による解説を拝聴しながら、この仏像を見学することができます。なお、観音堂には、この十一面観音の他に、十一面観音(具指定文化財)、大日如来(重要文化財)、大日如来・金剛力士(いずれも具指定文化財)などが所蔵されています。

守り継がれた 仏教美術の優品

(財団法人滋賀県文化財保護協会 吉田秀則)